

福島敏夫随筆集「乙戸南雑話—花鳥風月と星・虹を愛でながら」から

主宰論説 2

自然災害と物質文明

寺田寅彦博士が、【天災は、忘れたところにやってくる】という名言を、その随筆で述べておられる。最近頻発している想定外の天変地異を考えると、これまで考えたこともない時・場所・規模で起こることも多くなってくると考えられる。怖いものとして、「地震、雷、火事、おやじ」と並び称されてきた。しかし、最近、風水害や、竜巻なども、想定する必要がある、日本は、自然災害とつきあっていく必要があることを思い知る次第である。また、2011年3月11日に発生した東日本大震災を契機として、自然の恵みと猛威が認識される中で、我々が享受してきた科学技術とそれに基づく欧米型の大量生産・大量消費・大量廃棄型物質文明の大きな見直しが必要になっている。東日本大震災や南紀・伊豆大島の台風被害および2016年4月14～16日の熊本・大分大地震、想定外の台風10号による東北・北海道の風・水害、2018年の大阪北部地震、西日本の豪雨・酷暑、台風21号による想定外の風・水害、想定外の北海道胆振（いぶり）東部地震、2019年の夏の酷暑と大雨、台風15号及び19号による風・水害、洪水、土砂災害など、最近の想定外の天変地異等の自然災害への対応が緊急性を増している。しかし、長期的視野に立つとき、持続可能性と関連した環境調和性の評価と技術開発も必要かつ不可欠と考えられる。人類の長年の諸活動の結果、地球規模での浄化能力・自浄能力を超えた固体・液体・気体廃棄物の大量発生の事態を、抜本的に解決する方策を考え、持続可能な道を模索する英知が問われているようである。

令和元年11月22日脱稿

細菌等と伝染病

新型コロナウイルス感染の世界的拡大が、自然災害とは別の意味で、人類の存続に対する脅威となっているようだ。もともと、中国の湖北省武漢市で、コウモリが媒介となった新しいウイルスが人に感染したのが始まりとされるが、人から人への感染で、急速に拡大した。これまでにない新たなウイルスで、37.5℃を越える発熱とせきと呼吸困難を伴うとされる。対応する治療法も見つからないまま拡大し、死者もでるようになった。世界各国で、感染拡大防止のための人の集まりと移動制限措置に関する緊急事態宣言および非常事態宣言も出された。人類の英知を結集して、実効的な対応策に基づいて、収束し、沈静化することが、期待される。

歴史を紐解いて見ると、細菌等による伝染病と人類の戦いは、数多い。古くは、中世のヨーロッパで、ネズミを媒介とするペスト菌の伝染で、人口の3分の1が、亡くなったとされる。また、インカ帝国が滅亡したのは、スペイン人が持ち込んだ天然痘の感染拡大も

その原因のひとつだとされる。近世・現代では、第一次世界大戦の時のスペイン風邪の伝染拡大がある。コレラ菌など、光学顕微鏡で見つかる通常の細菌と違い、ウイルスは、更に小さく、通常は目に見えない。このウイルスは、新たに、人類の存続に警鐘を鳴らしている。早めに沈静化を願いたいものである。

令和2年3月21日